

今回の漢詩の会は日中交流をテーマに、盛唐の詩人李白が安倍仲麻呂(698～770)と、晩唐の詩人韋莊(736～910)が日本の僧侶敬竜と、それぞれ別れを惜しんだ二篇の詩を学びました。

安倍仲麻呂は、日本では知らない人はいないほど有名な人物ですね。百人一首に詩を残し、中国に遣唐使として派遣されました。一方、李白は杜甫と並んで、中国二大詩人の一人とされています。その二人がなんと同時代に生きていただけでなく、唐の都でめぐり逢い、友情を育んでいたとは初めて知りました。

仲麻呂は698年生まれ、701年生まれの李白とは3歳年上です。717年、19歳で遣唐使に任命され、唐に渡ります。仲麻呂は日本にいた頃より天才少年だったようで、正式に科挙の試験を合格したかは定かではないものの、唐王朝で官僚として33年も勤め、唐で亡くなっています。

李白は、25歳で故郷の蜀を出て剡中(浙江)に至り、更に道士呉筠に連れられて長安に上り、道教を信奉していた玄宗皇帝にお目見えします。時に742年、唐はこの頃まさに全盛期でしたが、一方で玄宗は楊貴妃にのめり込み、政治が疎かになり始めた頃だそうです。

李白は玄宗皇帝から格別の恩顧を受けたものの、その奔放な振る舞いが側近の妬みを買ひ、わずか2年足らず、744年には長安を追放され、流浪の旅に出ます。つまり、仲麻呂と李白は742年から744年という短い間に唐で出逢い、友情を育んだ、ということになります。

李白が追放された後も仲麻呂は唐に残りますが、753年、日本に帰る決意をして、長安を後にします。ところが、船が嵐に遭い、安南(ベトナム)に流れ着いたのでした。都を追放された李白はこの頃、江南

の地を放浪していましたが、仲麻呂の乗った船が遭難したとの知らせを聞いて、この詩を詠んだのだそうです。この後、仲麻呂は長安に戻り、生涯日本に戻ることはありませんでした。また二人が再会することもありませんでした。

晁卿とは安倍仲麻呂の中国名、卿は尊称です。

### 晁卿衡を哭す

李白

日本の晁卿帝都を辞す

征帆一片蓬壺を繞る

明月帰らず 碧海に沈む

白雲愁色蒼梧に満つ

「哭す」とは声をあげて泣くことですが、死者を悼む感情表現であると同時に、儀式の一つでもありました。中国では昔から、葬儀の際は近親の人たちが声を張りあげて泣く習慣があります。「蓬壺」とは秦の始皇帝の時代に、伝説の島とされた蓬萊のことで、「蓬壺を巡る」とは、蓬萊の島を通して、まだ先にある日本を目指す、ということです。「蒼梧」とは、中国の南方を指します。伝説上の帝王舜が亡くなった地とも伝えられています。「碧海」と対をなしているのも、漠然と中国の大地を表わしているのと取ることもできます。蓬壺も蒼梧もどことなく神話的なイメージですね。

三句目の「名月帰らず碧海に沈む」とは晁卿を月にたとえ、もうあの名月は帰らないと、嘆いています。絶句にとって三句目はカギになる一句ですが、普通に考えれば

必ず巡ってくる月が帰ってこない、という大胆な表現にはドキッとさせられますね。

李白という詩人はことさら月が好きなことで有名です。池に映った月があまりに美しく、それを取ろうとして池に落ちて溺れて亡くなったという伝説もあるくらいだそうです。

### 哭晁卿衡

作者：李白

日本晁卿辞帝都，

征帆一片绕蓬壺。

明月不归沈碧海，

白云愁色满苍梧。

李白と仲麻呂がどのくらいの親友だったかは分かりませんが、中国南部の海岸で海を見ながら、この詩から、日本の友がこの海に沈んでしまった、という驚きと悲嘆にくれる気持ちが伝わってきます。

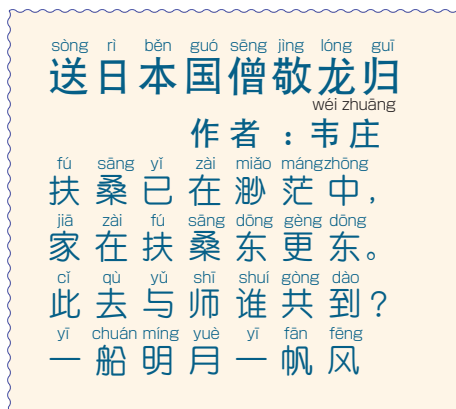
「チョット意地悪な見方をすると、大した知り合いでもなかった

のにここまで情感あふれる素晴らしい詩を作れること自体、李白はスゴイなあ、とも言えますね」と植田先生。何せ李白は「白髪三千丈」という詩句で有名です。一般人にとっては些細な出来事を大胆に大仰に表現できる天才でありました。

それにしても、はるか昔に仲麻呂が命がけで唐に渡り、当時の言葉を習得し、周りの官僚達と同等に王朝の重役を務めていたことは、本当にスゴイことだと改めて古の天才に思いを馳せてしまいます。言葉の不思議という意味では、蜀という当時の辺境出身の李白の言葉も、都言葉とは全く違っていたことは想像に難くないですが、李白と仲麻呂の交友に言葉の障害はなかったのかしら、と思わずにいられません。それにしても、中国のことわざ、「有縁千里来相会、無縁対面不相逢」(縁があれば千里も来たりて相会い、縁無ければ対面すれども相逢わず)とはよく言ったものです。縁という見えない糸に手繰り寄せられるように、日中の巨星は華やかなりし唐の都でひと時の交友を結んでいたのですね。

さて、「今日はどうしても、もう一首セットでこの詩をやっておきたいんですよ」と植田先生が次に講義して下さったのは、韋莊という詩人の残した「日本国僧敬竜の帰を送る」という詩です。日本では殆ど知られていませんが、中国では子供向けの詩集にも必ず載っている有名な詩です。中国の方がこの詩を引用するときは、日本人と仲良くしたいという気持ちの表れ、という日中友好のシンボルのような詩です。

作者の韋莊は836年生まれ。唐の滅亡後、五代十国時代に王建の建てた前蜀の幕下に加わった人物ですが、いわゆる詩人としてだけでなく〈詞〉の名人



として知られています。〈詞〉の最初のアンソロジーである『花間集』の中にも韋莊の作品が収められており、詩よりも〈詞〉のジャンルで有名な人物でした。この韋莊に送られている日本人の僧侶敬竜はどういう人物だったのか、というのは気になりますが記録に残されていません。

ただ、この詩を通して分かるのは、唐と日本の正式な交流であった遣唐使が廃止された後も、民間の交流は途絶えることなく脈々と受け継がれて来た、ということです。最後の遣唐使が派遣されたのは831年です。以後、菅原道真により894年に遣唐使は正式に廃止となりましたが、この間、たくさん民間人が命がけで中国に渡っていたという事実の一端が窺い知れます。

扶桑とは、もともと遙か東方の蓬莱国に生えていると伝えられる木の名前で、そこから派生して日本、或いは日本の方向を指します。日本人が自国のことを扶桑ということもあります。「三菱ふそう」の「ふそう」は「扶桑」から来たのだそうです。

韋莊と敬竜がどの様に知り合い交友を結んだかは、記録に残っていないので分かりませんが、「師」と言う言葉から韋莊が日本人の僧を敬い、日本に帰国していくのを見送った、ということがあったということなんですね。

船を照らす名月の光、帆に騒ぐ風の音だけを友として海の彼方に去って行った日本の僧。暗く果てしない大海原に、白い帆と海風……潮の香りが漂い、一人舳先に立つ瘦せた僧侶の姿に月明かりがさしている。船に激しく打ち当たる波の音まで聞こえて来るような映像的な詩です。

植田先生から時代背景や人物背景を伺い、詩の情感にもたっぷり浸ったところで、中国語で朗読練習となりました。「この詩は一、二、四句目の末尾の韻を踏んだ字がそれぞれ、zhong、dong、fengで、他にsangもあり、日本人の苦手な鼻腔内で響かせる音ngを練習するのに最適な詩でもありますね。」と植田先生。そう。『わんりい』の漢詩の会の趣旨は、

書き下し文で味わえない漢詩の音の世界を味わうことでもあります。メンバー全員、中国語学習者で拼音(ピンイン)が読めます。「最近、皆さん発音はとも上達しましたね。でも、もう一步、情感を込めて詠んでみましょう。詠み方は人それぞれで構いません」と先生に言われると一同苦笑い。植田先生のお手本の朗読は本当に情に溢れ強弱長短の谷間が美しく、素晴らしいのです。

今日もあつという間の素晴らしいひと時でした。最後に植田先生が仰った言葉が印象的でした。「この詩は日中交流にとって大変重要な詩ではないかと思えます。その昔、多くの危険を冒してまでも日中

の民間人は絶えず交流を続けて来ました。交流に貢献したのは高名な方々だけではありません。まさに、この詩は『わんりい』の会そのものではないか、と思えるのです」と。その言葉を聞いた代表の田井さんの嬉しそうな笑顔が、私の胸に焼きついた、そんな美しいひと時でもありました。

今年2017年は日中国交正常化45周年、来年2018年は日中平和友好条約締結40周年の年です。『わんりい』のような民間の草の根日中友好交流が、脈々と続いてきた日中の民間交流史をつなぐ一点であることを感慨深く胸に刻むとともに、今後益々盛んになることを願わずにいられません。

### 「漢詩の会」たより⑱

## 中国近代文学の創始者・魯迅の若き思い・他一篇

(2017年12月10日)

報告：田井光枝

中国近代文学の創始者といわれ、小説「阿Q正伝」や「藤野先生」「故郷」などで日本では中学生にも知られている魯迅(1881 ~ 1936)は、生涯を通じて沢山の漢詩を書いていたのだそうです。

今回の講座では、清朝の官費留学生として日本に来て間もないころの「自題小像」と、国民党及び軍閥の支配下で失意の中にいた晩年の作「送増田涉君帰国」が取り上げられました。魯迅の詩は発表する為でなく、清朝末期ほころび始めた、漢民族にとっては謂わば異民族である満州族の支配と、その後さらに軍閥支配が続く、鬱屈する自分自身の複雑な心の内をを詩に託したものが多く、暗喩的で難解といわれています。

例えば、辮髪は満州族の風習なのですが、これに従わない者は首を刎ねられました。魯迅は日本に留学(1902年)の当初、辮髪を丸めて帽子の下に隠すという仲間たちの風潮に飽き足らず、命がけで辮髪を切り落とします。「自題小像」はその

時の気持ちを詩に託したものです。魯迅が22歳の時の詩で、魯迅の心の内が象徴的に書かれており、人によっていろいろな解釈ができるようです。

灵台→人の心/神矢→神の矢(西洋近代文明のことか)/故园→故郷、祖国/荃→香草。『楚辞』の詩句に基づく。ここでは国民を指すとも考えられる/轩辕→漢民族の祖先・黄帝のこと

詩の内容は、「誰も入ることができないはずの心の奥に新しい文明の矢がささる/我が祖国はどす黒い暗雲が垂れ込めている/自分の心を寒空の星に託そうにも誰も我が心の内を察するものはいない/自分は我が身を民族の祖先、黄帝に捧げようと心に誓った」というような感じでしょうか。

「自題小像」に比べると晩年に書かれた「送増田涉君帰国」の詩の方は、帰国する友に寄せ、かつて留学した日本の秋をしのぶ魯迅の心情を感じます。

### 自題小像 (1903年)

líng tái wú jì táo shén shǐ  
灵台无计逃神矢  
fēng yǔ rú pán àn gù yuán  
风雨如磐暗故园  
jì yì hán xīng quán bù chá  
寄意寒星荃不察  
wǒ yǐ wǒ xuè jiàn xuānyuán  
我以我血荐轩辕

### 送増田涉君归国 (1931年12月)

fú sāng zhèng shì qiū guāng hào  
扶桑正是秋光好  
fēng yè rú dān zhào nèn hán  
枫叶如丹照嫩寒  
què zhé chuí yáng sòng guī kè  
却折垂杨送归客  
xīn suí dōng zhào yì huá nián  
心随东棹忆华年

- ・扶桑⇒日本のこと
- ・华年⇒少年